

生乳の確保等に向けた技術指導について（案）

※本通知（案）については、現時点案のものですので、実際に発出されるものとは異なる場合があります。

先日公表された「畜産統計（平成28年2月1日現在）」では、乳用牛の経産牛頭数は871,000頭と前年の869,700頭と比べ横ばいとなっており、これまで続いてきた減少傾向に歯止めがかかった状況にあります。また、生乳の生産量については、「牛乳乳製品統計（平成28年2月）」では741万トン（未確定値）となっており、前年の733万トンと比べ増加傾向にあります。

しかしながら、酪農後継牛の生産については、畜産統計における未經産牛の頭数が50万頭を下回っていることや、初妊牛価格が引き続き高水準で推移していることから、後継牛確保に向けた酪農家の自発的な取組を更に促していく必要があります。

このため、28年度補正予算において、繁殖性の向上や事故の発生防止等の飼養管理上の各地域における課題の解決に向け、「畜産・酪農生産力強化対策事業」において、飼養管理技術高度化推進のメニューを追加したところです。又、当該事業の活用にあたって、生乳の確保等に向けた技術指導を行う際に、参考とすべき事項を下記の通りとりまとめましたので、「乳用牛ベストパフォーマンス実現マニュアル」と併せ、貴局管内の各都道府県に対し周知願います。

記

1 子牛の事故率の低減

子牛の事故は、胎児死や初生牛の死亡が多くを占めており、特に、初生牛（出生後1か月未満で死亡しているホルスタイン種雌子牛）の死亡割合は、北海道で4.5%、都府県で3.4%となっています。このため、①母牛の分娩移行期の栄養管理の徹底、②分娩間近の妊娠牛の十分な観察と清潔で広い分娩場所の確保、③初生牛への初乳給与の徹底、④カーフハッチや清潔で乾いた敷料の利用や加温と異常牛の早期発見に努めてください。子牛の管理に十分な時間を割けない場合には、ほ乳ロボットの導入や子牛の預託の利用という選択肢もあります。

なお、ホルスタイン種から交雑種や黒毛和種を生産する場合には、ホルスタイン種子牛に比べ子牛の体格が小さいため、ミルクの多給によって下痢や疾病を起こすので留意してください。

《参考となる資料》

- 「和牛子牛を上手に育てるために一和牛子牛の損耗防止マニュアル」平成19年3月 （社）畜産技術協会
- 「初期発育に優れる黒毛和種の人工哺育技術」 農業の新技术No. 95 2009 愛知県農業総合試験場

2 分娩移行期等の栄養管理

育成牛や分娩移行期における栄養管理の適正化が経産牛の供用期間の延長のために重要であることは「乳用牛ベストパフォーマンス実現セミナー」でも指摘されています。このため、ボディーコンディションスコアの確認や代謝プロファイルテストの実施などにより、より客観的に牛の栄養状況を把握し、初妊娠牛及び乾乳牛の分娩移行期の栄養管理の適正化を行ってください。

特に、搾乳ロボットによる搾乳を行っている又は計画している経営にあつては、搾乳回数の増加や給餌方法・飼料給与体系の変更により搾乳牛が過搾乳や過肥になるなどのリスクがあるので、搾乳ロボットによる搾乳を前提とした分娩移行期の管理や飼料設計等を行うよう、搾乳ロボットメーカーから飼養管理指導を受けてください。その際、旧来の飼養管理方法によるのではなく、メーカーからの指導内容の忠実な実施に努めてください。また、搾乳ロボットを牛が自発的に訪問する上ではカウトラフィックが重要なので、この点についてもメーカーから十分な説明とノウハウの提供を受けてください。なお、ロボット搾乳への移行当初には牛の馴致などの必要が生ずるので、飼料作物の収穫時期などの繁忙期を避けるよう計画する必要があります。

3 搾乳機器の保守・点検の適切な実施

自己の経営で使用している搾乳機器について、必要に応じメーカーが示している点検手法や評価方法を用いて自己点検やメーカーによる定期的な点検を実施するとともに、不具合点が確認された場合、速やかに修繕を行ってください。搾乳ロボットについても、同様に保守・点検が必要です。

4 後継牛生産のための補助事業の活用

後継牛の効率的な生産を支援するため、「畜産・酪農生産力強化対策事業」により、性判別精液及び性判別受精卵の活用を支援しておりますので本事業の積極的な活用をお願いします。一回目の家畜人工授精で受胎しなかった場合であっても、同一の雌牛について性判別精液であれば6千円、性判別受精卵であれば100千円を上限として助成（補助率：1/2以内）できるので、2回目以降の授精・移植についても、補助額は上限の範囲内とはなりますが、本事業の活用が可能です。

また、後継牛の自家育成が困難な場合、公共牧場での育成等を推進するための支援（1集団当たり50万円）の活用も可能です。